

中国雲南における定点観測の継続

— 2004 年度調査報告 —

松 本 光 太 郎

目 次

これまでの調査報告について、以下に紹介しておく。

はじめに

1. 景洪鎮吉佐平寨村

(1) 2004 年 2 月

(2) 2004 年 7 月～8 月

(3) 2005 年 3 月

2. チーヌオ族の三つのテモクー（新年）

(1) 2004 年 2 月

(2) 2004 年 7 月

まとめ

はじめに

この調査報告は、2003 年度末から 2004 年度にかけて行った、中国雲南省シーサンパンナ・タイ族自治州における現地調査の報告である。2004 年度は、磯野弥生、手塚真、松本光太郎の 3 名で本学共同研究助成費を取得したが、共同調査ではなく、メンバー各自で独自の調査または文献研究を行ったため、松本光太郎のみが従来の調査報告の形式を踏襲して「2004 年度調査報告」として発表し、磯野弥生（本学刊行の『現代法学』）、手塚真（本学刊行の『東京経大会誌』）は別個に調査報告を発表することとした。なお、参考までに、

廣井敏男・村上勝彦・磯野弥生・橋谷弘・松本光太郎・荻原弘次「シーサンパンナにおける開発と保護をめぐって—1995 年度調査報告」、『東京経大会誌第』199 号、東京経済大学、1996 年 10 月 30 日

村上勝彦・磯野弥生・手塚真・橋谷弘・松本光太郎「中国雲南における観光開発と環境問題—1996 年度調査報告（1）—」、『東京経大会誌（経済学）』第 205 号、東京経済大学経済学会、1997 年 12 月 3 日

磯野弥生・堺憲一・手塚真・橋谷弘・松本光太郎・村上勝彦「中国雲南における観光開発と経済発展—1997 年度調査報告—」、『東京経大会誌（経済学）』第 213 号、東京経済大学経済学会、1999 年 8 月 15 日

廣井敏男・劉剛・松本光太郎「中国雲南省における少数民族のくらしと自然保護—1996 年度調査報告（2）—」、『人文自然科学論集』第 108 号、東京経済大学人文自然科学研究会、1999 年 10 月 20 日

磯野弥生・手塚真・橋谷弘・松本光太郎・村上勝彦「中国雲南における環境行政と観光開発—1998 年度調査報告—」、『東京経大会誌

誌（経済学）』第 231 号，東京経済大学経済学会，2002 年 9 月 15 日

磯野弥生・橋谷弘・松本光太郎「中国雲南における定点観測の再開—2003 年度調査報告—」、『東京経大会誌（経済学）』第 241 号，東京経済大学経済学会，2005 年 1 月 10 日

この他に，単独に発表された調査報告として，堺憲一「本田の広州プロジェクト」『東京経大会誌（経済学）』第 215 号（東京経済大学経済学会，2000 年）があり，雲南の交通問題にも言及している。

今回の調査報告では，第一にシーサンパンナ州景洪市景洪鎮吉佐平寨村のハニ族が年二回行う年越し行事のうちの夏の正月（イェクー）と，チーヌオ族の正月（テモクー）について，それらの変容過程に注目している。ハニ族については，観光化とはほとんど無縁のハニ族の村落における現状に注目し，観光化されている地域との相違に注目した。第二に，同州景洪市基諾（チーヌオ）郷のチーヌオ族については，観光化された正月行事，政府の式典としての正月行事，村落レベルでの正月行事の三つを比較することにした。ハニ族とチーヌオ族が，言語的にも風俗習慣の面においても，類似した関係にあることも重要である。なお，後者のチーヌオ族の正月については，その映像を編集したデジタルコンテンツが本学刊行の『コミュニケーション科学』第 22 号付属 DVD-ROM に収録されているので，ぜひとも御覧いただきたい。

木村正人・松本光太郎「フィールドワークの記録から（三つのテモクー：雲南のチーヌ

オ族の新年）」『コミュニケーション科学』第 22 号付属 DVD-ROM，東京経済大学コミュニケーション学会，2005 年 3 月 10 日

シーサンパンナでは，鄭曉波氏（勐養曼麼耐水庫公園經理），杜元偉氏（景洪市接待所經理），運転手の蘇氏，則四氏（景洪鎮吉佐平寨村前村長），二大氏（同村民），切二氏（同村民），チーヌオ民族郷政府科学技術担当幹部の楊紹華氏，同文化センター長の沙曉桑氏，同前文化センター長のシャーチャー（沙車）氏，同元区長のポーチョ（波者）氏，同元副区長の白佳林氏，郷政府財政所の白蘭氏，李曉艷氏（チーヌオ民俗山寨従業員），沙曉紅氏（同），木秀英氏（同），木蘭花氏（同），雲南大学の楊興義氏の各氏をはじめ，この他にも御名前を挙げてはいないが，非常に多くの方々の御世話になった。この場を借りて，感謝の意を表したい。

1. 景洪鎮吉佐平寨村

(1) 2004 年 2 月

いつものように，^{ツースー}則四氏（元会計，前村長）が応対し，同氏の姉の息子にあたる^{チェアル}切二氏が協力してくれた。今回の村長選挙では再選されなかったが，親戚にあたる人が村長になったので，対立選挙ということではなかったという。

<退耕還林政策について>

農地の区分を分析する際に，「荒地」という概念が問題になることは，前回の調査報告でも問題となった。今回の聞き取りでは，「荒地」

とは使用した後に放棄された焼畑地のことで、休閒地と考えてよいということであった。ただし、何年周期のローテーションという考え方はなく、まさに放ってある土地という意味のようである。そして、国有林ではなく、村落の責任地であれば、焼いた後にゴム、トウモロコシ、あるいは沙松などの樹木を植えるという条件で焼くことが可能であるという。国家が森林伐採を禁止したとはいえ、村落レベルでは全国で画一的に進むわけではなく、少しずつ変化して行くものだというのである。

退耕還林政策では、1 ムー（約 6.7 アール）当たり 150kg の穀物が政府から供与されるが、期間は 8 年間に限られる。この 8 年間に過ぎた後に生活に困るのではないかという質問をしたが、村落全体で 33 戸、170 ムーに過ぎないので、他の土地からの収入などで十分に食べて行けるということであった。森林回復のために植える樹木は、政府により沙松（香松）と桃花樹の二種類で、前者は海拔 1,000m 以上の所に植えることができるが、後者は 1,000m 以上の所に植えることはできないので、この両者から土地の条件に合わせて選択する。2002 年に植林した際には、主に前者を植えたが、これはゴムが海拔の低い所にしか植えられないことも関係があるかもしれない。これらの木が育てば、伐採して売ることが可能である。また、退耕還林政策を行ったのは、「個人の土地」、つまり責任地（請負地）である。

<農地の利用状況>

村落全体の農地の大まかな内訳は、水田 172

ムー、陸稲 350 ムー、トウモロコシ 950 ムー、ゴムが 500 ムーである（合計で 1,972 ムー）。これらの農地には、毎年一人当たり 2.3 ムー分の「土地費」（農業税）がかかる。課税の基準は、一年当たり畑地が 1 ムー当たり 6 元、水田が 10 元で、仮に 2.3 ムーが全て畑地の場合は、13.8 元となる。則四氏の場合は、家族構成は 5 人、11.5 ムーの畑地に対して 69 元ということであった。2.3 ムーを超える部分の土地については、納める必要がない。また、農地には固定された土地とそうでない土地があるが、いずれも「責任地」と呼ばれている。各戸に分けられていない農地もあり、こうした農地を全部合計すると、約 9,000 ムーとなる（2003 年度調査報告参照）。この村落は大きい方ではなく、例えば下手の道路に近いマンコボー村の農地はもっと広いという話であった。また、マンコボー村は、水力発電所の用地を提供したので、かわりに電気代が無料であると羨ましがっていた。この地域の行政区分は、曼個播（マンコボー）村民委員会の下に、新寨、平寨、曼個播、曼木克（マンムーケー）の四つの村落がある。

農地の各戸への分配（請負）の歴史は、以下の通りである。1982 年以前は人民公社制度が残っており、生産隊の下に管理されていたが、それから 1988 年に農地を各戸に分配するまでは、自由にどこの土地を耕作してもかまわなかった（いわゆる、生産ノルマだけを決めて、土地面積を制限しない方式で、これが大規模な森林破壊の原因となった）。その後、各戸に土地の分配を行うことになり、1988 年、1989 年、1993 年、1997 年の四回にわたって土地の分配が行われたが、この過程でそれまで

耕作されることがない土地までも含めて、続々と土地の分配が行われ、現在では分配可能な土地はなくなってしまったという。

さらには、もともと耕作していた面積の広い人が、現在でもその土地を耕作しているため、農地面積が広い人の方が豊かなので、村民の間には不公平だという不満が出ているという。そして、こうした広い農地を持っている場合、余った土地を他の人に貸している場合も少なくない。借り手は、村民とは限らず、景洪の漢族もいるという。一般には、借用年数は35年、1ムー当たり10数元となる。則四氏の場合にも、筆者たちが以前に焼畑の様子を見に行った村の上手にある部分の農地、約10ムーをすでに貸し出していた（実際に土地面積を計算したところ、30数ムーあったので、一回払いで1万元以上の収入があったという。）こうした事情から、村落全体で使用している土地は公式には約2,000ムーでこれには「荒地」（休閑地）も含まれているが、実際には4,000ムーの土地が利用されているのではないかということである。

この他に、村の裏手に「風景林」と呼ばれる水源林が1,370ムーあって、ここの樹木は許可がなくても切ることはできるが、売買は禁止されており、住居や家畜小屋の建材、燃料に利用することができるという。これら以外にも、まだ土地は残っているが、海拔が高く、斜度も急なので、「荒山」（非耕作地）になっているが、国有林ではない（この村落には国有林はない）。耕作したければ耕作してもよいのだが、海拔が高いので、第一に水がないこと、第二にゴムの栽培に適さない、第三にトウモロコシを植えても1～2年が限度で、か

つ作柄もよくない、第四に野生のイノシシが食べてしまうなどの理由で利用されていない。野生のイノシシを捕らえることは禁止されていないが、銃を取り上げられているので、捕獲できないということである。

アグロフォレストリーについては、まずゴムを植えて三年以内は同時にトウモロコシを植えることができるが、時期が限定されている。ここでは、ゴムの下に茶を植えることはない。また、ゴムを植えることによって、山の水量が変化したかどうかはわからないという。近年推奨されている、茶と樟脳を同時に植える方法もここでは採用されていない。なぜ茶を植えないかと言えば、近くに茶の加工工場がないので不便だということと、より多くのハニ族が集中しているモンハイ県の南糯山^{ナンヌオ}に比べて海拔が低く、気候が暑いことなどが原因だという。南糯山では、茶とサトウキビを主に栽培しているが、海拔が高いので逆にゴムは植えていないという。また、数年前に一時ゴムの価格が低落したので、人によってはゴムの木を切って、代わりにタマリンドを植えた人もいるという。この他に、初めてこの村落を廣井名誉教授、沖縄大学の劉剛教授と訪問した際に、非常に印象的であった「白花」であるが、食べることができるので、この数年市場で一個4～5元という高値で売れるので、ほとんど切って売ってしまったという。花が高い所に咲くので、枝ごと切ってしまう場合が少なくない。

＜ハニ族の年越し＞

ハニ族には、冬と夏、二回の年越しがある。冬の年越しは西暦の1月1日で、夏の年越し

り続けることができ、午後に村落へ運び、死者の家の外に置いておく。暗くなるのを待って、棺桶を家の中に入れ、死者をその中に安置する。三日目の朝に、(山の上に)運んで、埋葬する。息子がいないと、当日中に棺桶を作って、当日中に埋葬しなければならないが、山に一晩だけ置いておくこともあるという。どうしてこのようにするのかは、よくわからないという話であった。

(2) 2004年7月～8月

今回の調査は、主に平寨のハニ族(アイニ人)の夏の年越し、イェクーについてのものであった。村落の老人など、複数の人々から聞き取りを行ったが、場合によってはやや断片的になっている。ただし、近年はハニ族の民族文化に関する書籍が多数出版され、中には長期の調査に基づいたものもあるが、他方で大同小異の場合もあり、一定の言説ができて一人歩きしている感もある。その意味で、モンハイ県に比べると、伝統文化の「消失」が早く進んでいるこの村落における、ありのままの状況を記述することにも意味があるのではないかと考えている。

今回の訪問では、景洪からモンハイに通じる旧道からの山道が、以前は雨が降れば非常に難路であったが、部分的に舗装されており、また一部で民家を新しく改築し始めていることも目にとまった。後でわかったことであるが、村の入り口にある新築中の家は、則四氏の新居だということであった。以前の調査報告で「青年の家」、つまり一種の若者宿になるはずが、資金不足で中断したと聞かされていた場所である。たしかに、一時期は若者が踊

りを踊る場所として使用されたことがあったが、土地をならす工事の費用は則四氏の兄の息子の^{アルグー}二大氏が出していたという。7月31日は年越しの前日であるが、この日の午後三時～四時ぐらいに、景洪市政府の指導者や広東省、浙江省の商人が訪問するので、その前に水牛の屠殺(供犠)を行う。これに対して、モンハイ県のゲーランホー村には、多くのハニ族が住んでいるが、7月21日に行うという。

<ハニ族の年越し>

はじめに、村落の老人から、イェクーの日取りの由来についての伝説の聞き取りを行った。まず、(ハニ族の暦で)「十二支」が丑の人は、丑の日にあたる8月2日にお客を招いてもてなすことになっている。この老人がより世代が上の老人から聞いた「迷信」によれば、名望のあった老人が丑(牛)年の人は必ず丑の日に死ぬという話をして、実際に丑の日に亡くなったので、この老人を記念して、このように丑年の人は丑の日にお客をもてなすのだという。これ以外の「十二支」に属する人については、決まりがない。ハニ族の暦では、一ヶ月の中にも「十二支」がある。

さらに、ハニ族の人々の祖先にあたるアボコトという老人は、亥の日に生まれたが、この日は運も悪ければ天気も悪かったのに対し、丑の日だけが良かったので、その日に年越しをするようになった。そして、この老人、つまり祖先がこの日を年越しの日に定めたのである。ただし、この老人が亡くなった日についてはわからないという。

イェクーという名前の由来は、言葉としてはイェクーとは「雨が降る」という意味で、

イエクター・ザー（「明日、雨が降る」の意）、イエクター・アップ（アップは「祖先」の意）という呼び方もする。タイ族の水かけ祭りとは異なるが、雨乞いの儀礼という意味があるものと推測される。イエクターは同時に、丑の日に生まれた祖先の子供の名前であるが、アボコトの子供ではなく、アプミエという女神の子供である。漢族は、イエクターのお祭りのことを「ガータンパー」と呼んでいるが、ここではそう呼ばないという（このお祭りが「ガータンパー」であるという説明もあった。但し、地元の政府では1月1日をハニ族のガータンパーの日に定めて公式式典を行っている）。

ハニ族の一年には、かつては大きなお祭りが五回あった。第一が、1月1日のゴーパーで、ゴーパーは「年」、パーは「換える」、つまり「年越し」の意味で、12日目に年越しをしていたという。第二はグーシューで、4月に行うが、日付は不定、第三は8月1日のイエクター、第四は8月13日のウージー、第五が10月の稲の収穫の時期に行うカーイエであるが、現在では第一のゴーパーと第三のイエクターしか行われていないという。ハニ族の年越しが年に二回あるのは、二期作と関係があるという説もあるが、五つのお祭りのうち、二つだけが残ったということなのかもしれない。

また、イエクターが8月1日に行われるというのは旧暦によるもので、元来は7月の初めての丑の日で、この日のことをイエクター・アップと呼ぶのだというが、これはモンハイのハニ族についての話らしい。ゴーパーは、陸稲の収穫が終わった後に行われ、コマ回しをした。現在ではコマ回しは子供だけであるが、以前は翌日、つまり8月2日から（稲が？）

開花するまで遊ぶことができたという。ガータンパー節は、1月1日に政府が行うもので、ここでは自分たちで行うイエクターの方が盛大であるが、かつてはガータンパーの方が盛大だったという。収穫後の一番大きなお祭りなので、盛大に行っていたのだという。なお、インタビューの際にハニ語から漢語への通訳をしてくれた方（則四氏の兄の息子の二大氏）のお話では、ハニ族には五つの年越しがあるが、自分にとっても複雑でよくわからないということであった。

この他、前回の調査でも御世話になった切二氏によれば、かつては太鼓を敲く習慣があり、丸い形の太鼓の片面だけを、棒の先を布で巻いたバチで敲いたという。この太鼓は、漢族から買って来ていたという。太鼓は、ハニ語でその音色にもとづいて「トントン」と呼ばれるという。これ以外にグールンという銅鑼も使っていた。

また、イエクターの起源に関して、ここのハニ族には、祖先がタンパンニンマーという家あるいは「巢」のような穴から出てきたという話があるが、太鼓やひょうたんとは関係がないという。このタンパンニンマーというところがどういうところかはよくわからないが、もとは7人兄弟で、子供が非常に多かったという。女性もいたはずであるが、話の中では伝わっていないという。系図は、文字がなかったもので、口頭で伝えられて来たものであるが、男系についてはよくわかるが、女系についてはよくわからないという。さらに、前回の調査で出てきた、かつて病虫害が多かったという話については、切二氏も老人達も、それはモンハイのグーランホーのハニ族に伝わ

るもので、本には載っているが、ここでは伝わっていないという。ハニ族についての様々な言説は、モンハイの事例がモデルになっていて、ハニ族内部でも影響し合っている点が興味深い。

ただし、イエクターに関するイナゴにまつわる習慣は伝わっているという。イエクター・アボが終わった時に、稲に害虫がいれば、藁を使ってイナゴを縛ったものを三組作り、村の入り口に挿しておくのだという。一家で三組作り、各戸のものを一緒に挿しておく。その後、自分の家に持ち帰り、杵と臼でくだいてしまい、その藁は捨ててしまうのだという。

<かつての長老制度>

次に、シーサンパンナ・タイ族自治州よりも東側に位置する、やはりハニ族人口の多い緑春県からこの村の裏側に移住して農地を営んでいるハニ族の楊氏からも聞き取りをした。楊氏は水田と畑地の他、多種多様な果物類、養魚など、多角経営を行っている。楊氏は、かつての水牛の屠殺（供儀）について、刀を握ったのは、則四氏、つまり村長の助手にあたる会計の役割で、肉は平均分配し、頭と前足、後ろ足の腿は、長老のチョーバー（チーヌオ族の長老と同様の呼称であることが興味深い）に差し上げた。現在は、各々がお金を出して買うようになった。頭は分配しにくいので、則四氏の兄の息子にあたる二大氏がもらうが、実際にはお金を払う。かつてはチョーバー（長老）がいたが、現在では村長となった。また、ガータンパーの語源については、ガーは「道」、タンは「切り開く」、パーは「換える」の意であり、全体として焼畑地の切

り替えに合わせて、新たに道を作るという意味だという。一年に二回、焼畑地を換えるので、二回、道を作っていた。新しい道を開くという意味である。また、楊氏の解説では現在の村長のことをかつてはチョーバーと呼んでいたということであるが、同じハニ族でも方言が異なり、ここではジャオバーと発音し、助手はラーヌグーと呼ばれるという。

切二氏によれば、チョーバーが現在の村長、ラーヌグーは会計にあたるということで、則四氏が水牛の屠殺で刀を執ったのもこの理由によるものであろう。また、これらの長老の他に、かつてはズーマーというさらに地位の高い長老がいたという。

切二氏からは、前回の調査で話題になった、村の門についても話を聞くことができた。かつては村の門を作る時には、ブランコも作ったという。この村の門はハニ語でロックハと呼ばれ、村の中と外の境界であった。かつては、村の門は常時作ってあり、不吉な人、あるいは不吉を持っている人（これらをビーと呼ぶというが、これはタイで信仰される精霊のことであろうか？）は入ってくるができなかった。ただし、やはり細い回り道があったという。現在ではこの意識はなくなっているという。門の作り方は、老人と長老だけが知っていたという。

また、水牛の屠殺は、7月31日のお昼前に行われ、その次第はビデオに収めてあるので、できれば次作のデジタルコンテンツを本学の『コミュニケーション科学』付属DVDで紹介したい。屠殺は、現在の村長の指揮の下に行われ、肉は各戸に平等になるように切り分けて小さな山にして行くが、この総数は78個と

いう説と 68 個という説があった。実際に数えてみたところでは 62 個であった。切二氏によれば、約 60 個であるが、半分に分ける場合もあるので、68 個と言われるのだということである。一山で 100 元である。会計らしき人が、村長の指示のもとづきながら、記録をつけながら、人々に肉の山を渡していた。

<餅つき>

8 月 1 日は、前夜からお酒を飲んでいた人々も多かったため、餅つきが始まるのは、お昼前になってからであった。則四氏の親戚にあたる数人の女性が、立て杵と臼を使って、蒸した糯米を交代でつく。臼に、少量のピーナッツを入れるのが特徴であるが、この方が風味が良くなるのだという。

餅つきが終わる頃、各家で昼食が始まり、牛の血液に薬味を入れて半分ぐらい固まるまで熱した料理、牛肉のたたきを混ぜたつけだれ（漢語で「^{ドローション}朶生」と呼ばれる）など、タイ族とも共通した料理が出された。この他に、手みやげとして、バナナの葉にくるんだ餅と、ミンチにした牛肉に香味野菜をたくさん入れて、バナナの葉に包んで蒸したものが持たされたが、この特製の肉団子が非常に美味であった。お祭りの時には、これらを手みやげにする習慣だということだが、正月に出される最高の御馳走としてふさわしいものである。この他、手みやげとして、ハニ族の民族バッグを、則四氏とその親戚の家から合計で 4 個も持たされた。

この村のイェクーでは、現在では踊りや歌などの出し物は一切なかった。1 月 1 日のゴーパーの方が、この点では盛大だという話であ

ったが、今後の調査の課題である。

<商品作物>

数年前まではトウモロコシが主な商品作物であったが、二～三年前からはゴムとなり、この一～二年は価格が良いため、作付面積の広い家では、一日で 300～400 元の収入になる場合もあり、少ない家でも 20～30 元にはなるという。面積と労働力によって異なるが、一年で 2～3 万円の収入になるという。今後の調査報告でも述べるが、新築中の家が見られるようになったのも、このゴムによる収入と関係がある。

<服を着ない幼児>

この村落を訪問して、気になっていたのが、幼児がたいていは服を着ないでいることである。はじめは、経済的理由によるものかとはばかり思いこんでいたが、これはここのハニ族の習慣であるという。「気候がよく、健康にもよいため」という話を聞いたが、たしかに子供のうちから適応していなければ、成長してからも、簡単な衣服で生活することはできないだろう。幼児死亡率などの実情なども合わせて調査する必要があるだろう。

(3) 2005 年 3 月

今回も継続して則四氏を訪問した。まず、前回の「肉団子」であるが、漢語で朶生焼、ハニ語でシャービェムンと呼び、要するに牛肉のミンチを混ぜたつけだれを焼いて固めたというような意味である。課題の 1 月 1 日のゴーパーのお祭りには今年も行くことができなかったが、1 月 1 日から 1 月 10 日ここで

中国雲南における定点観測の継続



写真1

左上：供犠にされる水牛

左中：村人に分配される牛肉

左下：ハニ族の正月料理

右上：餅つきをする女性たち

右中：餅を丸める作業

右下：民族衣装を着た則四氏一家

も行われたという。ただし、今の若い人にはどういう意味かよくわからないという話であった。また、例の白い花は、現在でもよく売れるという。

今回の調査で、やはり目立ったのは、ゴムによる収入で建てた、あるいは建設中の住居である。則四氏の新居の場合も、一昨年にゴムの樹液の採取を開始し、価格は kg 当たり 12 元、作付面積が 40 ムーで 7～8 トンの収量があったからである（9 万円あまりの収入があったことになる）。現在、村落ですでに完成したのが三戸、建設中が二戸であるが、いずれも西洋風の二階建てで、ハニ族の伝統的な住居とは大きく異なったデザインである。

こうした背景には、単にゴム生産の拡大ということだけでなく、前々回の調査でも話題に上った、土地使用権の売買がある。この村落の上の方にある山はすっかりゴム林に変わっていたが、2005 年になって広東省の商人が 1,400 ムーもの土地の使用権を買収し、ゴム林にするための伐採作業をすでに行ったという。契約は 1 ムー当たり 450 元で、1 ムーに 30 株のゴムを植えることができる。以前であれば、政府が許可しないような広大な土地であるが、村内の 40 戸余りが土地を少しずつ売却し、合計でこれだけになったということである。すでに述べて来た、村内の農地が約 4,000 ムー、総面積が 7,000 ムーという数字からしても、非常に大きな比重を占めることがわかる。以前は「自留山」で、トウモロコシや陸稲などを植えていた土地である。山全体からすれば、山の西側の一部が水源林なので伐採できない他は、山全体が全てゴム林になることになる。前回もお会いした二大氏が、オートバイでこ

の土地に案内してくれたが、この山道も 2005 年の 1 月 4 日～10 日の間に開通したものであるという。全長、6 km である。標高がゴム栽培に適しているかは未知数である。

他方で、この村落から帰る道路沿いで、森林保護などを訴える標識も多数目にする事ができた。運転手さんの解説では、政府が全国的に推進している天然林保護工程によるもので、すでに述べた沙松を植林している。しかしながら、こうした沙松は植林とは言うものの、天然林とは必ずしも言えないという言葉が強く印象に残った。

2. チーヌオ族の三つのテモクー（新年）

(1) 2004 年 2 月

<問題の所在>

今回の調査では、今まで訪問することのなかった、チーヌオ族の新年、テモクー節の取材が主な目的となった。チーヌオ族の人々からは、これまでもテモクーへのお招きをうけていたが、二月上旬という時期的な問題もあり、行くことができずにいた。特に、1999 年のテモクーは、チーヌオ族が独自の民族として中国政府に公認されてから二十周年に当たる大規模なテモクーを企画してただけに、参加できなかったのは非常に残念なことであった。この場を借りて、チーヌオ族の方々にお詫びを申し上げたい。

これまでの筆者のチーヌオ族に対する問題関心は、第一にチーヌオ族が独自の民族として承認された経緯、つまりチーヌオ族のエスニシティに関わる問題、第二に沙仁という漢

方薬の栽培を中心とする商品作物の栽培による山地農業の成功モデルの検証、第三に経済発展の中で観光開発が果たす役割の三点であったが、今回の調査を契機として、第四の問題として伝統文化の再生と変容について考えて行きたい。

というのも、これはチヌオ族に限った問題ではないが、「文化大革命」により、多くの少数民族の伝統文化が破壊され中断されたが、その再生のプロセスには複雑な問題が存在することの重要性に、チヌオ族の具体的事例に接してみて、改めて気づかされたからである。さらには、すでに述べた観光開発との関係でも、観光開発は一面において伝統文化の破壊をもたらし、本来の伝統文化とは違ったものに変質させる危険性を持っているが、同時に環境破壊を必ずしも伴わない「持続可能な発展」の有効な手段の一つでもある。

しかしながら、チヌオ族の観光開発は、シーサンパンナ全体の観光開発の中での位置づけが絶えず不安定であり、チヌオ族の人々が豊かになる方法として十分に機能していないという問題が存在している。すでに、これまでの調査報告の中でも、「チヌオ民俗山寨」という観光用の民族村建設の経緯と現状について紹介して来たが、このチヌオ民俗山寨のその後の状況についても、テモクーの問題と合わせて継続調査を行って行く（この原稿を執筆している時点で、すでに2006年2月8日に行われたテモクーの調査を終えており、その結果については、次の2005年度調査報告の中で紹介する予定である）。

今回の調査では、これまでと同じく郷政府の科学技術担当幹部の楊紹華氏、文化センタ

一の沙曉桑氏、さらに今回から面識を得た郷政府財政所の白蘭氏らを初めとする多くのチヌオ族の友人の非常に熱心な協力を得た。この場を借りて、この調査報告の冒頭での謝辞に重ねて感謝の意を表する。

<テモクーの日程>

テモクーはチヌオ族にとって最大の祭りであることから、中国政府の民族政策の一環として、西暦の2月6日～8日と定められている。チヌオ族郷政府主催の公式式典の他に、やはりこの期間に前後して各村落での行事も行われることになっているという説明を受けたが、いろいろと事情を聞いてみると、実情はかなり異なる。全面的な調査はできなかったが、2004年の場合、大まかな状況は次の通りである。

まずは、2月5日に自宅で牛や豚を屠殺して各自で年越しを行い、2月6日に郷政府主催の式典が郷政府前の広場で自治州と景洪市政府の指導者を招待して行われる。その後、これまでの調査報告でも紹介した、崖崩れに合っただけで村全体が移転したパーピャオ（巴漂）村において、政府の援助により村落全体が新築されたことに感謝の意を表して、政府の指導者たちをもてなす会食が行われた。こうした政府による式典（ここでは「政府によるテモクー」と呼ぶことにする）の他に、文化大革命終結後、テモクーを政府の手で復活した過程で、1990年に試験的にテモクーが行われた村落（試点）であるモーチョー（麼卓）村では、2月5日から2月7日まで（村落での聞き取りでは2月4日から2月8日早朝まで）、伝統的な村落レベルでのテモクー（ここでは「村落

のテモクー」と呼ぶことにする)が行われ、チヌオ族の「太陽鼓」が休むことなくたたく続けられる。

そして、現在では実際にテモクーを行っているのは、このモーチョー村とすでに2月2日にテモクーを行ったパークン(巴昆)村だけで、この二つの村落では春節は行わないが、他の村では漢族と同じく春節を行うだけである。これ以外に、1982年にやはり試験的にテモクーが行われたバードゥオー(巴朶あるいは巴奪)村のテモクーは、2月5日の時点ですでに終了しているとのことであったが、その内容については十分に確認できなかった。また、村全体が移転した上述のバーピャオ村でも、2月5日の夕方五時からと、2月6日のお昼の会食の後にも行うという話であったが、太鼓をたたくかどうかなどは確認できなかった。なお、バーピャオ村は、2003年10月に郷政府近くの新しい場所に移転したが、老人はまだ古い村に残っているという。また、チヌオ民俗山寨で働いているバーヤー(巴亜)村出身の方からの聞き取りでは、バーヤー村でもすでに春節を済ませており、太鼓もたたくかなかったが、2月6日～8日の間に行う場合には太鼓をたたくことになり、またこの三日間のいずれかの日に行わなければならないという話であったが、具体的な状況は確認できていない。この他には、後述するが、チヌオ民俗山寨では、観光客向けに、基本的には毎日、テモクーの出し物が上演されているが、これは「観光用」のテモクーと呼ぶことにする。以上、三つのテモクーが行われていることになる。

全体として、テモクーを復活・維持してい

るのは、政府が試験的に復活させた村落にほぼ限られており、多くは漢族と同じ春節を行っているということであったが、これは筆者の予想を超えるものであった。チヌオ族が1979年に、改革開放以後としては唯一独自の民族として承認されたことからすれば、独自の民族として承認されたということと、民族独自の文化の復活ということの間には、かなりのギャップがあるのではないかと感じられた。

また、白蘭氏御夫妻の御厚意で、筆者は2月5日の昼食をモーチョー村で御馳走になった。その際のメニューは、芭蕉の花、豚の顔の肉、タケノコと豚のスペアリブ、牛肉のたたきを混ぜたつけだれ(「菜生」)、牛の皮、ティラピア、豚肉と根菜、キョンのたたきを混ぜたつけだれ、竹桐と豚肉、野生の果物のつけだれ、水香菜、エンドウ豆の苗などの料理が並んだ。乾杯の際の音頭は、最初にタイ語で行われ、その後はチヌオ語で行われた。タイ語はシーサンパンナの一種の公用語である。チヌオ語の音頭は、「酒を飲んで楽しく酔っぱらおう」という意味であった。酒は度数が高く、自家製のトウモロコシ酒であった。

翌日の2月6日にも、郷政府によるテモクーの終了後、やはりモーチョー村で昼食をもてなされたが、案内の白蘭氏の御実家を含めて、ちょうど日本の年始のように三軒を回って御馳走になり、一部の政府の指導者とも一緒になった。白蘭氏の夫から、真新しいチヌオ族の男性用民族衣装を着せていただいたが、チヌオ族も新年に新しい服を着て祝うのだという。

なお、移転したバーピャオ村であるが、以

前の調査報告でも、近代化された伝統的様式の家屋が多数新築されていることにふれたが、香港の赤十字と中国政府の貧困援助部門の援助によって建設され、デザインも政府が参与して統一したものになったという。ちなみに、東京経済大学雲南研究会のメンバーである村上勝彦がかつて継続調査を行っていた李二氏はバーピャオ村の人である。

<テモクー復活の過程>

こうしたテモクーの復活の過程については、雲南大学のチーヌオ族調査組による調査報告『基諾族－景洪基諾山基諾族郷』に、かなり詳しい記述がある。

これによれば、かつてチーヌオ族の「牛皮大鼓」（太陽鼓とは書いていない）は、村の神の化身だと見なされ、長老のチョーバーによって管理されていた。牛皮大鼓はチーヌオ族の神器であり、普段はチョーバーの家の中に設けられた鼓房という大鼓の保管室に置かれており、一年に一度のテモクーを始める時にこの牛皮大鼓を祭る儀礼が行われていた。しかし、1958年からの「大躍進」や「政治補課」により、チーヌオ族の伝統的な生活様式全体が破壊され、宗教活動は禁じられ、チョーバー制度も廃止されてしまった。1958年4月にバーヤー村で行われた四つの「鬼門」を閉ざす儀礼が、同年9月には批判対象となったのが始まりであった。改革開放政策後、1979年にチーヌオ族が独自の民族として公認されると、テモクーがチーヌオ族の民族文化の中で中心的な役割を持っていたことから、1982年に郷政府のイニシアティブにより前述のバードゥオー村においてテモクーを試験的に復活

させることになった。しかしながら、チョーバー制度を復活させていなかったため、一種の出し物に過ぎなかった。

1988年には、それまでテモクーは村落によって異なる日程で行われてきたが、西暦の2月6日～8日の間に行うことが、州政府人民代表大会で決定され、合わせて1990年にはモーチョー村でテモクーを試験的に復活させることになり、さらにはチョーバー制度を復活させて、伝統的なテモクーが行われることになった。このことにより、詳細は後述するが、村落に二つの大家族があったため、正副合計で4人のチョーバーを選出することになった。また、チョーバー制度を復活させるために、かつての鼓房の代わりとしてチョーバー房（チョーバーの家）が造られることとなった。州政府は、20万元の予算を組んで、一つの村落ごとに1万元のチョーバー房を建設するという方針を出したが、この報告書の時点ではまだ一部が実現されただけであり、その後の詳しい経緯はわからない。

チョーバー制度を復活させる過程も紆余曲折があり、文化大革命時代に批判された他に、本来は住居の新築の儀礼を主催した人だけがチョーバーになる資格があるとされていたため、チョーバーの候補にあがった最年長者が、自分にはその経験がないため、自分の身に災いが降りかかることを恐れて、なかなか同意せず、説得を続けてようやく引き受けることになったという。また、この時に使用された太鼓は、1979年に独自の民族として公認された際の記念式典の際に制作されたものを借用したが、これは伝統的な製法にもとづいておらず、また一日だけ使用された後に、郷政府

の中にしまい込まれてしまったという。

「三つのテモクー」ということを述べたが、この調査報告でも、三種類の太鼓があると述べている。第一は商業用の太鼓で、バーポー（巴坡）村に建設されたチーヌオ民俗山寨で使用されている太鼓であり、第二は娯楽用の太鼓で、1980年に郷政府の文化センターが「農村文芸表演隊」を組織し、出し物を行うために各村で次々に作った太鼓や、1999年にチーヌオ族公認20周年を記念して制作された太鼓であり、第三は伝統的な「神器」で、1990年にモーチョー村でチョーバー制度が復活された際に作られた太鼓で、後述する太鼓送りの儀礼の際に、ある村人の親戚が不用意にその太鼓の上に座ったことから、不幸なことが次々に起こったと信じられているものである。

＜かつてのテモクー＞

郷政府文化センター長の沙暁桑氏によれば、かつてのテモクーは一ヶ月間に及ぶものだったという。チーヌオ族の暦では一年は11ヶ月で、この他にいわば「ゼロの月」があり、それがテモクーを行う祭りの月であり、合わせて12ヶ月と数えるのだという。後述する2004年の三人の長老からの聞き取りでは、チーヌオ族が1979年6月6日に公認されたので、1986年以前は毎年6月6日に行って来たが、1986年にシーサンパンナ自治州で毎年2月6日～2月8日の間に行うことが法的に定められてからは、西暦の2月6日に行うこととなった。2月は、チーヌオ暦の7月にあたり、11ヶ月以外の一ヶ月で、ほぼ漢族の春節が行われる2月と同時期にあたる。日付を6日としたのは、モーヌオ族公認に尽力した民族学者

の杜玉亭氏の発案である1979年6月6日を記念して残したものである。

そして、かつてはチーヌオ族の村落には、母親の村、父親の村、子供の村の区別があり、母親の村とはバードゥオー村、父親の村はストゥー（司土）村（新ストゥー村公所モーチョー村、つまりモーチョー村のことだと思われる）、子供の村はパーピャオ村とバーポー村のことである。そして、最初は母親の村でテモクーを行い、これに父親の村と子供の村の住民が参加し、その次には父親村に母親の村と子供の村の住民が集まってテモクーを行い、最後に子供の村に母親の村と父親の村の住民が集まってテモクーをおこなっていたという。

現在では、こうした母親、父親、子供といった区別はなくなり、期間も一ヶ月から三日間ほどになり、一緒にテモクーを行うようになったという。かつては、テモクーの日程を母親の村に聞きに行き、母親の村が終了してから、自分の村で行うというやり方があったが、現在では日程は自分の村で決めている。また、かつては日程をチョーバーが決めていたが、現在は村長が村人の意見を聞いて決めるようになった。また、現在では選挙で選ばれた村長と、世襲で大家族の年長者が担当するチョーバーの両方がいるということであるが、これはモーチョー村のことを念頭においての話だと思われる。

この他、テモクーの元来の意味は、鍛冶屋、つまり製鉄技術の始まりを記念するということであったが、上述の雲南大学の調査報告に書かれている、大晦日に行う鍛冶屋の儀礼は現在では行われなくなったという。郷政府の

テモクーのプログラムを作成した楊紹華氏によれば、こうした内容は郷政府のテモクーのプログラムの中に吸収されているという話であった。また、後述する2004年7月の三人の長老からの聞き取りでは、「テモクー」あるいは「テマオクー」の「モ」「マオ」には「盛大な」という意味があるという。

かつてのテモクーについては、杜玉亭氏による『基諾族簡史』や『基諾族』を初めとする多くの文献資料に、チーヌオ族にあったとされる「氏族制度」とともに詳しく紹介されているが、沙氏からの聞き取りはこうした言説が現在どのように考えられているか、また現在の状況との関係はどうなっているかといった問題を理解する上で、一定の意味があると思われる。こうした村落間の関係については、後述するように、次回の2004年7月の調査でより詳しい聞き取りを行った。

<政府によるテモクー>

政府によるテモクーについては、すでに本学の『コミュニケーション科学』第22号付属DVDに、撮影したビデオに字幕をつけたものを収録してあるので、詳しくはこれを御覧いただくこととして、ここでは大まかなプログラムと、DVDの中では部分的にしか紹介されていない、場内アナウンスによる解説の内容について紹介することにする。

会場は、郷政府の前の広場で、上手にチーヌオ族公認25周年の横断幕などの装飾があり、その下で多くの演目が披露され、その手前に政府の指導者などの来賓席、その後ろに外地から来た人々の席が設けられ、チーヌオ族で演目に参加しない人は、これらの席のさ

らに後ろ側で立ち見をしなければならなかった。やはり、政府による式典という色彩が濃厚であった。太鼓も合計で大小四つも準備されていた。気になったのは、太鼓を祭る儀礼などが始まると、報道関係者であるか観光客であるかを問わず、カメラやビデオカメラを持った人々が、観覧席の前へ出て行って、さらには長老たちが行う儀礼を取り囲んでしまうことで、これにはさすがに閉口した。まさにカメラの砲列が取り囲んでいるとしか言いようがなかった。また、こうした撮影を行う人々の中には、これまでの調査報告でも紹介した「シャングリラ」の文字が入ったおそろいのカメラマンジャケットを着ている人もいた。筆者は、原則として来賓席の後ろ側に三脚を立てて撮影するように努めた。

ただし、2006年2月8日に再び政府によるテモクーを撮影する機会があり、いずれ別の機会に紹介する予定であるが、この時はチーヌオ民俗山寨の広場を囲んで、来賓席に向かって演目が行われ、観客席を背にする形になったので、付き添いの景洪市政府の運転手さんの強いすすめもあり、筆者も中へ入って撮影せざるをえなかった。もともとが、政府の指導者や観光客に見せるためのものであり、会場整理のガードマンの指示に従って撮影する限りでは仕方のないことかもしれないという印象も受けた。

式典は午前10時開始ということであったが、筆者が午前9時過ぎに到着した時には、すでに広場の入り口に民族衣装を着たチーヌオ族の男女による出迎いの行列が出てきた。入り口のところで、歌声や銅鑼の響きとともに、白蘭さんをはじめ、数人の女性が竹の杯



写真2

- 左上：「祝テモク祭り」の横断幕
- 左中：「チーヌオ族公認二十五周年」
- 左下：現地住民の三角帽子が最後列に見える
- 右上：七人の長老
- 右中：長老の儀礼を囲むカメラの砲列
- 右下：「シャングリラ（香格里拉）」の文字

にトウモロコシ酒を入れて、客人に勧めていた。少数民族のお祭りを訪問する際には、よくあることであるが、ここでもこの酒を飲まなければ中には入れないということになっていた。

開始時間が来ると、文化センター長の沙曉桑氏の先導で、ほぼ村ごとにまとまった出演者が入場した。入場が終わると、郷政府の党書記の李春陽氏の司会が開会宣言を行い、続いて羅建寧郷長（チヌオ族）、召亜平景洪市長（タイ族）、江普生州委員会書記、周志軍州人民代表大会副主任（チヌオ族、チヌオ語で行った）の祝辞が行われた。祝辞が終了すると、七人の長老による太鼓を祭る儀礼が行われ、七人の長老が順番に太鼓のところに行き、酒と水をかけてからそれぞれ太鼓を敲いた。まずはこれらの長老が太鼓をたたくのが決まりである。来賓たちにもバチがわたされ、順番に太鼓をたたいた。その後各村とチヌオ民俗山寨による歌舞が順番に行われ、最後は観客も混ざっての「参与式」の歌舞でフィナーレとなった。以下、楊紹華氏からいただいた、場内アナウンスによる解説文を紹介しながら、それぞれの演目について説明していく。

最初に、「国家によるチヌオ族公認25周年と2004年のテモクーを迎える」ことを讃える男女掛け合いのアナウンスがあり、続いて演目毎に以下のような解説が朗読された。具体的には、DVDと合わせて御覧いただきたい。

1) スットラー（司土拉）：太陽鼓の儀礼

「(女性) 指導者のみなさん、来賓のみなさん、現在行われているのはスットラー、つま

り太鼓を祭る儀礼です。スットラーはテモクーの演目の中でも最も重要で、テモクーが来る度に、村中の村民が老若男女を問わず、村長の指揮により鶏と牛を屠殺し、神聖な太鼓に向かって祖先を祭り、来年の五穀豊穡を希求します。現在、村内のチョーバー（卓巴）、バーヌー（巴諾）、チョースー（卓色）、スーヌー（色諾）、コプル（科普）、ナイグー（奶厄）、モーピー（莫丕）の七人の長老が全郷人民を代表して神霊を祭ります。チョーバーが次のように祝詞を述べます。」

「(男性) 春の光が美しい季節に、アーモヤオバイ（阿姨腰白）が天地を創造し、マーヘーマーニュー（玛黑玛妞）は私たちの祖先です。以前、私たちは日、月、星、河を知らなかったが、最初の神であるアーモヤオバイが私たちを導いて星河天地を理解させた。山の上を見れば青々と木々が芽吹き、山の下を見れば、万物はみな復活して、蝉は殻を脱ぎ、春の歌を奏でている。村の神よ、私たちは赤銅の鶏と肥えた豚、新鮮な卵、三包みの新鮮な野菜を用いてあなたにお願いいたします。金の魂と銀の魂、男の九つの魂と女の七つの魂、はじまりの神よ私たちに力を授けたまえ。これから私たちが何事もうまくいき、五穀豊穡でありますように。私はまだ若輩ではありますが、村長として全郷の長老や村民を代表して、あなたにお願いいたします。私の申しますことはどれもみな真実ではありますが、私の申し上げることが金銀の如く、いつまでも色あせず、神霊が私たちをお守り下さいますように。」

以上のアナウンスと同時に、長老の代表がチヌオ語で祝詞を述べていた。

2) ガチュレー (嘎住咧) : 日本の追儺 (節分の豆まき, おにやらいなど) にあたる。

「現在, 入場しているのはバーカー村の代表です。彼らが演じているのは, チーヌオ族の古い民間舞踊であるガチュレーです。ガチュレーの意味は古いものを新しいものに取りかえるということで, チーヌオ族のテモクーの中でも必ず踊らなくてはならない伝統舞踊です。樹皮をまとっている人はチーヌオ族の過去の歴史と一切の古くなった物事で, 村内の長老たちはこれらを過去のものとし, 新しい一年と取りかえるのです。チーヌオ族はガチュレーというこのような特殊な舞踊によって昨日に別れを告げ, 新しい明日を迎えるのです。」

3) 太鼓舞 : 解説なし

4) シーシーサンサン (細細桑桑)

「歌詞の大意は, 父母が子供を育て, 大きくなったなら, 良い人と娶せ, そうすれば金銀を身にまとい, 十匹の大きな赤い馬と十頭の大きな野生象を手に入れるだろう。みんな広場にやって来て, 一緒に愛を語りましょう, そして優美な舞姿を見せて, 楽しく過ごしましょう。」

5) 備耕舞 : 耕作前の支度の舞, 解説なし

6) 播種舞 : 種まきの舞, 解説なし

7) シャーガオ (沙高)

「シャーガオはチーヌオ族特有の民謡の形式で, 内容は豊富で, 季節の歌, 恋愛の歌, お祭りの歌, 結婚の歌などに分けられます。現在, スートゥー (司土) 老寨によって歌われているのは, シャーガオの形式の季節の歌です。歌詞の大意は, チーヌオ族の一年は 11 ヶ月で, 一ヶ月は 30 日です。セミが鳴いて,

木々が芽吹いて, 万物が蘇って, 一年に一度のテモクーがやって来て, チーヌオ族の村々は楽しいお祭り気分になります。皆さんの一年が, 五穀豊穡で, 何事も幸運でありますように。」

8) ジークー (遅刻) : 竹を用いた狩猟の歌

「現在, 入場しているのは, チーヌオ族郷老協会 (郷老は長老の意) の代表で, 彼らが演ずるのはチーヌオ族の古い伝統掛け合い民謡のジークーです。猟に出て獲物が捕れると, チーヌオ人は竹を楽器にして, 収穫を祝います。そのため, 竹の音の鳴り具合が何を収穫したかを伝え, 竹の鳴る音はチーヌオ人民の明日の希望なのです。」

9) 花摘み : 子供達による花の踊り

10) テモニュー (特懋牛) : テモクーのフィナーレを飾る踊りで, 男女の掛け合いで, 政治的スローガンも交えたアナウンスが流される。詳細は省略。終了後, 指導者と来賓にパーピャオ村へ行って昼食をとるよう, アナウンスされる。

この他, こうした出し物を見ていて気がついたことに, チーヌオ族の民族衣装も地域や村落によって大きく異なり, 非常に多くのバリエーションがあることである。楊氏や白蘭氏によれば, 新しくデザインされた服装も多く, 白蘭氏の服装は自分でデザインしたものであった (標準的なスタイルであるが, 色合いに水色を取り入れているところに特徴がある)。目立っていた服装に, 体の全面に「基諾族」の「基」の文字を大きく刺繍した集団があったが, チーヌオ族の古い「氏族」の子孫で, 服装のデザインは新しいものらしい。

<モーチョー村の二人のチョーバーの起源>

すでに述べたように、「村落のテモクー」が行われるモーチョー村には、二つの大家族集団があって、正副二組のチョーバーと呼ばれる長老がいる。このため、後述するように、最初は片方の大家族の方で太鼓をたたき、途中でもう片方の大家族の方に太鼓を運んで、再びそこでたたく。最初の大家族の正チョーバーはブルーチャー（布魯車）という人で、この人は言葉を話すことができない。後の方の大家族の正チョーバーはブルーチェ（布魯傑）という人で、この人の祖先はバーピャオ村から来たと言われる。また、これら二人のチョーバーは、年齢によって最初の方のブルーチャー氏が長男、後の方のブルーチェ氏が次男であると見なされ、長男はバルロー（巴羅）、次男はバーヌー（巴怒）あるいはバーニー（巴尼）と呼ばれる。年齢が上の正チョーバーの大家族の方で先に太鼓をたたくことになっている。チョーバーの構成についての詳しい解説は、後述の2004年7月の調査の記録のところで説明することにして、ここではまず、どうしてこの村に二人のチョーバーがいるのかについて伝わっている伝説を紹介しておく。解説してくれたのは、白蘭氏の父親のバイラーチェ（白臘切）氏の他、漢名が李志浩、チヌオ名がシャオシェンジャ（小先者）という方である。

伝説によれば、モーチョー村に一人の男がいたが、家が貧しくて外へ出て働くしかなく、バーピャオ村に行って子守の仕事をしていた。この男が出て行かなければならなかったように、当時のこの村は不作で家畜も育たず、何

をしもうまく行かなかった。そのため、村人は人をやって、タイ族の土司（朝廷から官職を与えられた領主のこと、漢族の県知事という説もある）に聞きに行った。当時、この村には一人のチョーバーしかいなかったが、タイ族の土司の答えは「二人のチョーバーが必要」、つまり二派に分かれた方が発展できるというものであった。そこで、バーピャオ村に行っていたこの男に頼んでこの村に戻って来てもらい、村の下手の方に耕地を与えて、チョーバーになってもらった。これが、チョーバーが二人になった理由である。この男の名前は、バーピャオあるいはチョーピャオ（卓漂）と呼ばれ、現在のブルーチャーの一族の祖先にあたるが、それは千年以上も昔のことであるという。そして、この一族はバーピャオと呼ばれるが、これはバーピャオ村へ行って戻って来た家族だからである。もしも他の村、例えばバーカー（巴卡）村に行っていたら、バーカーという名前になっていたであろう。

この他に、次のような説もある。この男がバーピャオ村へ行って子守をしていた時に、モーチョー村のチョーバーとなる年齢の順番が回って来たが、この男は貧しくて、とてもチョーバーが務まるような状況ではなかった。しかし、どうしてもこの男でなければならなかったので、モーチョー村の人々はこの男に財産や土地を分け与えて、安定して暮らせるように取りはからい、この男に戻って来てチョーバーになってもらうことができた。この男の方がもう一人のチョーバーよりも年長だったので、それからこの村には前述の長男はバルロー（巴羅）、次男はバーヌー（巴怒）



写真 3

- 左上：先にバーピャオ側がたたく太陽鼓
- 左中：ペイラーの長老を待つ他の長老たち
- 左下：ペイラーの長老（中央右）の到着
- 右上：松明に灯がともる
- 右中：太鼓送り（太鼓盗み）
- 右下：ペイラー側に到着した太陽鼓

あるいはバーニー（巴尼）と呼ばれる二人のチョーバーがいるようになった。この村には、もともと一人のチョーバーしかいなかったが、一人のチョーバーだけでは何事もうまく行かなかったので、現在の省長にあたる人に聞いてみたところ、もう一人チョーバーがいないと、この村は豊かになれないという返事だったからであるという。

<村落のテモクー>

モーチョー村では、2月4日から2月7日、実際には2月8日の夜が明けるまでテモクーを続ける。ただし、2月4日は豚を屠殺するだけで、(2月5日に?)牛を屠殺してから、はじめて太鼓を敲くことができる。2月5日から2月6日の夜までは、郷政府に近い方の手前の「氏族」の方のチョーバーの家の前に太鼓を下げて敲く。2月5日に筆者が昼食に招待された時も、ここで一日中たたいていた。そして、2月6日の夕方17:00、実際には20:30~21:00頃に、太鼓送り(送鼓)あるいは太鼓争い(搶鼓)の儀礼が行われ、郷政府から遠い方のもう一つの氏族のチョーバーの家の方に太鼓を運ぶ。太鼓送りの儀礼を行うには、最初の方のチョーバーの家に正副二組、合計四人のチョーバーが集合しなければならないが、後の方のチョーバーは体調が良くないと忙しいことからなかなかそろわず、遅くなってからようやく四人のチョーバーが集合し、別の老人が歌を歌い始めると、双方のチョーバーが太鼓送りに同意し、太鼓送りの儀礼が開始された。太鼓送りが始まる時には、村人がたくさんの松明に火を灯し、老人の女性たちが歌をうたった。爆竹も鳴らされた。

太鼓は数名の男によってかつがれ、行きつ戻りつしながら後の方のチョーバーの家へと向かって行った。行きつ戻りつするのが、太鼓争いと言われる所以である。太鼓が後の方の氏族の家に届くと、大きな歓声が上がった。太鼓は所定の場所に安置し、チョーバーがお酒で太鼓を祭る儀礼を終えるまでは、たたいては行けない。この儀礼が終われば、長老たちから順番に太鼓を敲くが、これからは基本的には誰がたたいてもかまわない。男女も問わない。それから、2月8日の夜明け前まで(午前2~3時という説と午前5~6時という説あり)、約一日半たたき続けなければならない。そして、最後は、最初の方の氏族、つまり年齢が上の方のチョーバーの家に太鼓をしまわなければならないので、再び太鼓を戻しに行かなければならない。そして、これ以後は太鼓をたたいてはならず、もしもたたくと何か不吉なことが起きるのではないかという感じがするという。

太鼓送りの儀礼が終わると、再び四人のチョーバーをもてなす宴席が設けられるが、誰もが非常に充実した表情だったのが印象的であった。

<観光用のテモクー>

チーヌオ民俗山寨でのテモクーの出し物、つまり「観光用のテモクー」は、政府の定めたテモクーの前日である2月5日にも、通常通り上演されていた。筆者が訪れたのは、モーチョー村への予備訪問の後であったが、15:30~16:00まで、「太陽鼓」の踊りが上演された。2003年度調査報告で言及した、土産物店の店員とガイドを兼ねているチーヌ

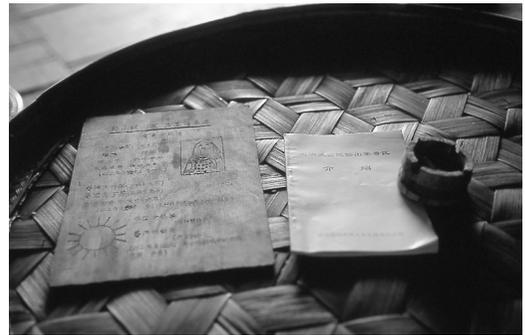


写真 4

左上：「原生态」の文字が見える

左中：民俗村の入り口の券売所

左下：パイヤはたったの 1 元

右上：民族舞踊の見せ場

右中：茶のメニューとガイド用参考書

右下：移転完了のパーピャオ村

オ族の女性たちと再会することができたが、残念ながら今回の観光客はさらに少なく、筆者の他には数人程度であった。原因は、シーサンパンナ全体の観光開発が振るわない中で、唯一と言ってよいほど成功している原始森林公園の会社が野生象の谷（野象谷）を買収したが、チーヌオ民俗山寨はその際の買収から除外され、団体旅行の観光コースから外れ、単独の観光地となってしまったことが主な原因であるという。現在の経営者は湖南人で、個人経営だという。観光用のテモクーも、円形の大きな観覧席は全くの空席で、土産物店側の観覧席に筆者を含めた数人の観光客と店員、歌舞団のメンバーがいただけであった。次の2004年の調査の際に、楊氏も観光ルートからはずれたことが不景気の原因であるが、このチーヌオ民俗山寨を建設する際に郷政府はあまり出資できなかったのも、これらの問題にも郷政府としてはあまり干渉できないということであった。問題は、観光客が少ないことであるという。

今回の調査での一つの収穫は、ここの店員兼ガイドさんたちが、観光客相手に解説ができるよう勉強するための解説書であった。もとは野生象の谷の会社のガイドたちが使っていたが、チーヌオ民俗山寨が観光ルートからはずれたので、こちらで使うよう、「取り戻して」来たのだという。書名は『版納（パンナー）基諾（チーヌオ）民俗山寨景区区紹介』で、シーサンパンナ雨林文化有限責任公司により発行され、「チーヌオ民俗文化村」の夏紹瑩という人が2000年5月30日に序文を書いている。この本は全体で56ページに及び、チーヌオ族の文化について、チーヌオ民俗山寨

の展示にそって、詳しく解説している。ガイドが予備知識として学ぶ部分と、ガイドが観光客に話す解説文から構成されている。杜玉亭氏の著作を元にしてはいることはまず間違いなく、その意味では学術的ではあるが、同氏のやや行き過ぎた推論やフィールド調査の信憑性がやや疑われる部分も含めて、全体が単純化され、非常に明確な内容になっている。

最初の「チーヌオ族簡介」では、チーヌオ族がシーサンパンナにおける唯一の先住民族であると考証されていること、1950年代にはチーヌオ族が「原始社会末期の氏族部落段階」（ここでいう「部落」とは、「民族」に発展する以前の段階）にあったこと、チーヌオ族の民族名が母方オジを表す「チー」とその子孫を意味する「ヌオ」に由来すること、創造の女神が世界を創造し、チーヌオ族の祖先である兄妹が大太鼓の中に入って大洪水を逃れたので（洪水神話と兄妹結婚神話）、「太鼓の中から出てきた民族」と呼ばれていること、長老であるチョーバーの役割、テモクーの起源は鍛冶屋の儀礼であることなどが述べられている。チーヌオ民俗山寨の入り口に掲げられた横断幕にも、「部落」の文字が見られた。

また、「シーサンパンナ・チーヌオ民俗山寨景区紹介」では、チーヌオ民俗山寨がシーサンパンナ観光コースの東ルート上にある省が定めた観光地であり、位置はバーポー村で、景洪から20km、モンヤンから10km、郷政府から4kmの位置にあること、またチーヌオ民俗山寨内の配置について解説している。(1)チーヌオ民俗山寨の太鼓をかたどった正門、(2)チーヌオ族の祖先の兄妹の塑像、(3)創造の女神の巨大レリーフ、(4)太陽と月の

花壇，(5) チーヌオ族の文化芸術の展示，(6) チーヌオ族の文化習俗陳列館（チョーバーの家），(7) チーヌオ族のロングハウス，(8) チーヌオ族の大太鼓踊りの上演，(9) 清王朝がチーヌオ族のリーダーを「悠楽同知」という世襲の地方官に任命して守備隊を置かせた際の城壁址，(10) 牛角路（牛の角をかたどった，バーポー村観光の入り口），(11) 江沢民主席がかつて訪問した農家，(12) チーヌオ族の村落の景観，(13) 熱帯雨林自然生態群落遊歩道，である。

この本全体も含めて，最大の問題は「ロングハウス」のことで，杜玉亭氏も 1950 年代の調査の際に，実物ではなく古老の記憶として調査したものであり，1999 年に筆者が訪問した際にも，酒席での話ではあるが，チーヌオ族の幹部の一人が，「ロングハウスがあったということになっているけれど，本当は存在していなかった。」と話してくれたことがある。チーヌオ族が，イ族の一部とならず，独自の民族として公認された際の根拠にどれくらいの客観性があるのかという問題と合わせて，非常に印象深く記憶している。チーヌオ族の観光開発の中で，「ロングハウス」の存在が動かしがたい存在へと変化して行くことの重大さを考えさせられた。ただし，この本の全てに問題があるわけではなく，チーヌオ族の「太陽鼓」については，チーヌオ語での原義は「丸くて掛けておくもの」という意味で，現在の人々によってその形状から「太陽鼓」というイメージで見られていると説明しており，このことはチーヌオ族の人々自身には「太陽鼓」という意味はなく，外部の人々がそう呼んでいるだけであるという事情とあまり矛盾

しないものになっていた。

この本の内容については，現在の店員兼ガイドさんも，遠回しな言い方であるが，「面白い内容になっているよ」とコメントしていた。

＜商品作物の現状＞

このガイド向けの解説書には，これまでの調査報告でも取り上げて来た砂仁栽培と当時の江沢民主席訪問の関係についても書かれていた。

すなわち，1989 年 11 月に江沢民主席が現在のチーヌオ民俗山寨のあるバーポー村の沙博という老人の家を訪問し，今では穀物の自給が達成され，家畜も多くなっているなど，チーヌオ族の経済状態が改善されているとの話を聞いて喜び，「生活はよくなっていますね，どんな作物を植えているのですか」と尋ねたところ，沙博氏が「落花生，茶葉，ゴム，砂仁を植えています，砂仁の買い付け価格が低いので，割に合いません。」と答えた。江沢民主席はこのことがわかったので，北京に帰ってから関係部門に対して特に指示を出して，砂仁の買い付け価格を調整した。これによって，チーヌオ族が大量に砂仁を栽培しようという積極性が高められた。現在では，チーヌオ族はほとんどどこの家でも砂仁を植えており，砂仁はチーヌオ族の経済の基幹産業となったのだという。

これまでの調査報告でも，チーヌオ族の砂仁栽培は，非常に大きな関心の対象であった。以上の話しが本当であれば，チーヌオ族における砂仁栽培発展の一つの重要な背景についての情報を得たことになる。チーヌオ族における商品作物栽培による経済開発モデルの成

功の背景には、こうした江沢民訪問という大きな出来事があったわけである。

商品作物栽培の現状については、今回も簡単に聞き取りをおこなった。現状としては、砂仁、パッションフルーツともに買い付け価格が低く、それに対してゴムの価格が相対的には高くなっているが、全体として景気はあまり良くないという話しであった。パパイアの価格も kg 当たり 3 元であった。タマリンドもタイの品種を導入したが、タイのものほど甘くならないという。シーサンパンナでそれなりにうまく行っているのは、観光ぐらいであるという話しもあったが、チーヌオ族の場合、その観光であまりうまく行っていないのであるから、状況はかなり深刻である。ただし、テモクーを見に来た外地の人や、景洪の人々から聞いた話では、チーヌオ族もかつては貧しくて、新年を迎えても肉はあまり食べなかったが、現在では鶏、牛、豚のどれも食べるようになってきているなど、チーヌオ族はシーサンパンナの中でも比較的豊かではないかという印象があるという。筆者が今回、チーヌオ族の村落を訪問した際にも、売っている鶏肉や豚肉はおいしくないが、自分たちで食べる分の鶏や豚には米やトウモロコシを与えているので、自分で育てた家畜はおいしいという話しであった。そして、このように穀物は自給できているが、商品作物が不況なので、景気はよくないという。

この他、筆者が訪れた村落で、白い大きなポリタンクに水を汲んで、高台にある家へ水を送っていたが、これは決してチーヌオ族の水道が完備していないという意味ではなく、多くの家は溪流から引いた水道が設置されて

おり、水道を引けない家にも水を送る態勢が整っているということの意味しているようであった。やはり、チーヌオ族は独自の民族として認定されたこともあり、中国の指導者が訪問していることもあって、政府から特別の配慮を受けていることが再確認された。

これ以外の変化としては、郷政府へ通ずる道路沿いに、茶葉加工場が建設され、「チーヌオ山茶」をアピールするモニュメントが作られていたが、この点については 2005 年度調査報告の中で再度言及することにした。2004 年 7 月の聞き取りでは、思茅地区のプーアルの人が経営者であるという。

今回のテモクーを記念して掲げられた横断幕の中にも、「生物強郷」のスローガンがあり、チーヌオ民俗山寨でも「生態」の文字がスローガンの中に見られた。雲南に限らず、中国全体で「原始生態」というスローガンが観光開発の中で強調され、学術シンポジウムのテーマになったりしている。チーヌオ族の地域には、中国建国以前にも行商人が出入りしており、シーサンパンナにおける伝統的な茶葉の山地、「六大茶山」の一つに数えられていた。つまり、チーヌオ族は、市場経済から全く隔離されていたわけではなく、市場経済の中でマージナル、つまり周辺的な地位に置かれており、漢族などの商人が主導権を握り、チーヌオ族は受動的な立場におかれていたと言ってよいだろう。この意味では、チーヌオ族の経済状態は、決して「原始」そのままではない。「原始生態」という概念についても、それが意図するものは何か、今後の検討課題としたい。

(2) 2004 年 7 月

<モーチョー村のチョーバー制度>

今回の調査では、まず前回の「村落のテモクー」が行われたモーチョー村の長老制度、すなわちチョーバー制度について、主に親族関係に重点を置いた確認の聞き取りを行った。

モーチョー村には、二つの「氏族」ないし、大家族があることはすでに述べたが、前回のテモクーの際に先に太鼓を敲いていた、郷政府に近い方の手前の「氏族」はバーピャオと呼ばれ、これに対して太鼓を運んで行った先で、奥の方に位置する方はペイラーと呼ばれる。それぞれ、正副の長老、チョーバーがいるが、まずバーピャオの正チョーバーはブルーチャー（布魯車）氏、77 才、言葉の話せない人で、チョースー（卓色）、つまり副チョーバーはブルーサイ（布魯腮）氏、70 才である。二人は兄弟であるが、大家族中の男性の年齢順で役割が決まるので、兄弟順というわけではない。現在の村長は、彼らの弟のブルーチェ（布魯傑）氏の息子のチェツ（傑澤）氏であるが、名前の付け方は、ハニ族と同じく、名前のしりとり式の父子連名制である。これに対して、ペイラーのチョーバーもまたブルーチェ（布魯傑）氏、70 才であるが、チヌオ族では同名の人が非常に多いという事情がある。チョースーはチョーズ（周澤）氏、70 才である。同時に、バーピャオのブルーサイ（布魯腮）氏は、村落全体ではバヌー（巴努）、つまり第三の長老に、ペイラーのチョーズ（周澤）氏は同じくスーヌ（色努）、第四の長老にあたる。この他に、

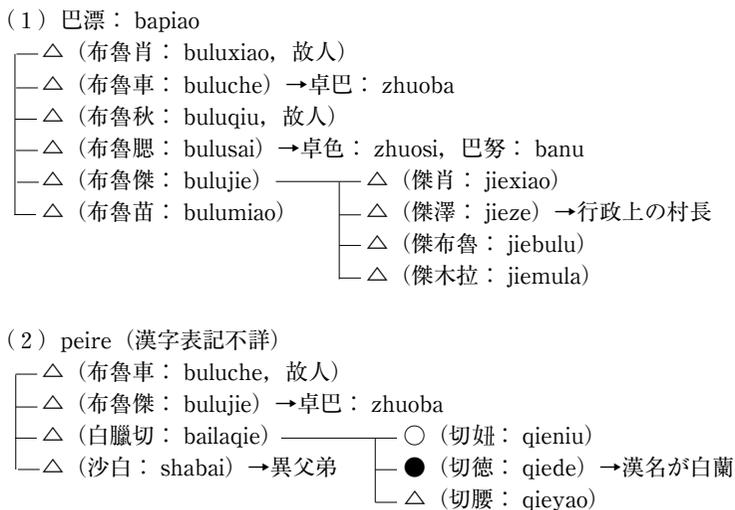
バーピャオとペイラー以外に、上述のバードウオー（巴朶あるいは巴奪）村出身のツウムウラー（資木拉）氏がコプル、つまり第五の長老を務めている。外部の村から来たので、チョーバーやチョースーにはなれないのだという。以上の長老をめぐる家族関係については、図 2 を参照していただきたい。

<チヌオ族の命名法（1）>

ちなみに、今回御世話になった白蘭（バイラン）氏さんは、ペイラーのチョーバーのブルーチェ（布魯傑）氏の弟であるバイラチェ（白臘切）氏の娘にあたり、白蘭は学校に通うときにつけた漢語名で、チヌオ語の名前はチェドゥー（切徳）という。

チヌオ族の命名法については、上述の父子連名制の他に、かつては幼児が病気にかかる割合が高かったので、他人に名前を付けてもらう習慣もあった。これに加えて、生まれて来た時に臍の緒を右肩にかけていた場合には名前がなく、左側にかけていた場合には名前の最初がシャ（沙）で始まり、その後父親と同じ部分を持つ名前をつける習慣があったという。楊氏の話しでは、チヌオ族の命名法は、（1）父子連名制、（2）外観や性格によって名付けられる。前述の「シャ（沙）」には、「背負う」という意味があるが、左右の区別はないという。また、漢族の「巫師」（トランス状態があるかは不明）に見てもらって、女性が妊娠した時の運勢が良くないので、呪術を行った場合には、名前の前半を「ブラー（白臘）」とする、つまり「ブラー○」という名前を付け、これは男女共通である。前述のバイラチェ（白臘切）さんはこの例で、兄

図2 長老の家族関係（英文表記は中国語の拼音による）



*卓色 zhuosi の周澤 zhouze 氏とは兄弟関係にない。

弟でも名前の最初が異なるのは、このような理由によるものであった。

なお、白蘭氏以外でも、誰もが以上に述べた他に、漢語名を持っている。白蘭氏の父親の世代は李姓であり、親子でも姓が異なることになり、これは漢族とは大きく異なる点である。

<モーチョー村のチョーバー制度復活の過程>

モーチョー村は、「文革」以前には、チヌオ族の中でもチョーバー制度や風俗習慣をよく残していた村落であったが、1958年～1976年の間はこれらは停止され、「批判闘争」、すなわち弾圧の対象となった。ここでの、チョーバー制度の復活は実際には1976年にすでに開始されていたが、当時はまだ人々も心配していたので、1982～1983年頃によく整ったものになったという。1976年に復活した際のパーピャオのチョーバーはバイラーチョー（白臘車）氏で、白蘭氏の母の父にあたり、

1997年に亡くなられた。現在のチョーバーとは直接の親子関係はない。チョースーはブルーサイ（布魯腮）氏の兄にあたるブルーシャオ（布魯肖）氏で、この方もすでに亡くなっている。ペイラーのチョーバー、チョースーは現在と同じで変わっていない。当時はまだ年齢的に若かったことから、復活当初は必ずしも年長者ではなかったわけである。なお、1958年の「最後の」チョーバーとチョースーは、パーピャオがムーラーピャオ（木拉標）氏、ツェーバー（也白）氏、ペイラーのチョーバーはチョーサオ（周掃）氏とチェバイ（傑白）氏であった。また、「太陽鼓」は「文革」で破壊され、1976年に一個作り直したが、チヌオ族全体で一番早いかどうかについては後述する。テモクーが復活したのも、やはり1976年で、当時はテモクーの最後の日に、儀礼的な意味を持つ狩猟を行い、銃を撃ったが、現在では銃が回収されてしまったので、魚取りや山菜採りに変わったという。こ

の村では 1976 年以來中斷したことはないが、他の村では必ずしも事情は同じではないという。チョーバーがきちんと制度化されていない村落では、村長が行っているが、概念としては異なる。かつてのチョーバーは村長でもあった。

また、チーヌオ族で、一つの村落に複数の「氏族」があるのは、この村落のみであろうという。モーチョー村はいわゆる「父親寨」にあたるが、「母親寨」については、バーヤー村出身でチーヌオ族全体の長老として活躍してきた、後述するシャーチョー（沙車）氏らから事情を聞けるだろうということであった。1950 年代から 1960 年代にかけてチーヌオ族の人材が多数輩出されたのは、バーヤー村とバーカー村だという。楊氏もバーカー村の出身であるが、バーカー村ではチョーバー制度は復活していないという。しかし、現在バーカー村は雲南大学などの尽力で、「文化生態村」に指定され、「チーヌオ民族博物館」が設立され、観光と研究の両面で注目されている。

<チーヌオ民族博物館>

さて、民族博物館のことにふれる前に、この研究会でも疑問となっていたことに、中国語で「チーヌオシャン」と呼ぶときの「シャン」の発音が、漢字で「山」にあたるのか「郷」にあたるのかがはっきりしないことがあった。このため、これまでの調査報告でも、「チーヌオ山」と表記したり、「チーヌオ郷」と表記したりで、必ずしも統一されていなかった。楊氏によれば、ここの地名はチーヌオ語では「チーヌオ・ロック（基諾洛克）」と呼ばれるが、「ロック」は「山」を意味している。

行政地域としては、「基諾山基諾民族郷」で、略称は「基諾郷」を使っているということであった。したがって、今後はチーヌオ郷と表記することにして行きたい。ただし、シーズンパンナに長く住んでいる漢族の人々たちは、民国時代までの旧称である「攸樂山」（ヨールーシャン）という呼び方を現在でも使っている。「ヨールー」は「チーヌオ」の音が転じたものであると考えられているので、チーヌオ山という呼称もあながち間違いだともでは言えないものと考えられるだろう。

この民族博物館は、バーカー村のバーカー小寨に建てられている。バーカー村には、バーカー老寨と、1950～1960 年代にそこから分かれたバーカー新寨、それにバーカー小寨があり、小寨は自然保護区のバッファーエリアに位置しているが、これが「文化生態村」として指定された理由の一つであると思われる。ちなみに、上述のモーチョー村の両側の山地はほとんど退耕還林が行われ、8 年契約であり、8 年後には「規範的」な、つまり乱伐でない伐採は可能であるという。穀物については、8 年間保証されたことになる。楊紹華氏は、新寨の出身である。

民族博物館建設には、雲南大学人文学院人類学系雲南民族文化生態村項目組の指導者である尹紹亭氏（焼畑文化の研究で知られる研究者）の他、フォード基金、中国科学院对外合作局アジア・アフリカ・ラテンアメリカ処長の工藤市兵衛氏、日本の黛民族舞踊団（黛節子氏主宰）、モンルンの熱帯植物園などが協力したという。博物館は 2001 年に着工、2002 年に完成した。経費の面では、フォード基金が援助した、雲南省で五カ所の「文化生態村」

の一つであり、チーヌオ族の他に、新平県の花腰タイ族、文山自治州邱北県のイ族、騰衝県和順郷の漢族、元陽県のハニ族(?)などがある。博物館は文化生態村プロジェクトの一部であり、文化生態村が博物館を管理し、雲南大学はこのプロジェクトの費用から出された予算によって展示や資料などの援助を行う関係になっている。筆者が訪問した際には、雲南大学の楊興義氏が、人類学専攻の学生のフィールドワーク実習の引率で長期滞在していたところであった。学生の中には、筆者がチーヌオ族を以前から調査していることを知って、質問をしてくる学生もいた。また、展示や資料について楊氏や学生からも説明を受けた。その話の中で、博物館はチーヌオ族にかつてあったとされるロングハウスを模したものであるが、実際にはタイ族の高床式住居の影響を受けているのではないかという意見を聞くことができた。

入場料は、博物館の入場券が5円で、この収入は博物館の従業員、博物館管理委員会、及びバーカー小村委員会を通じて文化生態村へと配分される。博物館に入場する時に購入する方式であり、文化生態村への入場料ではない。村落自体が観光スポットとされているわけではないということであった。

<三人の長老とテモクー復活>

楊氏の紹介で、チーヌオ族全体を代表する三人の長老から聞き取りを行った。三人とも、郷政府の指導者を退職した方であるが、現在でも郷政府の仕事に協力している。政府のテモクーに登場した七人の長老の主要メンバーでもある。シャーチョー(沙車)氏は、前文

化センター長で、現在の文化センター長で、筆者たちとも長年の交流のある沙暎桑氏の父親である。郷政府のテモクーでは、第一の長老をつとめ、音楽関係の指導も行っていた。ポーチョ(波者)氏は、元の区長、つまり現在の郷長であり、テモクーではチーヌオ語によるアナウンスを担当していた。三人目が白佳林氏で、元の副区長である。三人とも、前述の人材を輩出したバーヤー村の出身である。三人の長老以前の状況についても質問をし、特に杜玉亭氏とともに1950年代にチーヌオ族が独自の民族として公認されるよう主張した、中央民族学院(現在の中央民族大学)を卒業したチーヌオ族幹部について質問したが、三人の長老によれば、中央民族学院ではなく、雲南民族学院を卒業したバイラーヤオ(白臘腰)氏のことではないかということで、1950年代に当時のチーヌオ区長を、「文革」終了後に郷党書記を歴任したという。白佳林氏は、1955年～1957年まで副区長を務めた。

最初は、テモクーの復活過程について聞き取りをした。それによると、復活の契機には、やはりチーヌオ族の独自の民族としての公認に尽力した杜玉亭氏の果たした役割が大きかった。杜氏は、1977年～1978年に調査を行い、1979年にチーヌオ族が公認されたが、その際に杜氏がテモクーは民族の特色であることを強調して、テモクーの復活を提唱した。これを受けて、当時の区長であったポーチョ氏が、他の二人の長老とも協力して、テモクー復活に着手したという。

最初に復活することになったのが、前述のバードゥオー村とバーヤー村について、1980年に政府主導でテモクーを復活することにな

り、三人の長老がその指導にあたった。これによると、各村落での復活の順番は以下の通りである。1981年にバードゥオー村で、最初に民間文芸組が組織され、1982年にバーヤー村新寨、1983年にバーカー村小寨、1984年にモーチョー村（白佳林氏が主に担当）、それ以後さらにバーポー村、バーピャオ村、ジャーレイ（炸呂）村、バーヤー村中寨、チャーディー（茶地）村（この村について筆者は十分に確認していない）で回復され、合計で8村（茶地村を含めると9村なので、バーヤー村新寨と中寨は一つと数えられているのかもしれない）で復活されたが、バーカー村では行わなくなったので、現在でも残っているのは7村であるという。ただし、整った形で行われているのは、モーチョー村とジャーレイ（炸呂）村の二村だけであるという。

テモクーが復活したものの、前述のようにテモクーの祭り自体は復活したが、チョーバー制度はまだ整備されていなかった。1979年6月6日にチヌオ族が公認されて以来、実際には二度にわたって停止したことがあったので、整備された形で復活したのは1984年のモーチョー村以後のことだという。それ以前にも、1981年のバードゥオー村、1982年にバーヤー村新寨、1983年にバーカー村小寨でも復活させたことがあったという。

次に、「卓巴房」（意味は「チョーバーの家」であるが、実際には太鼓の保管場所を意味する）設置の過程である。ポーチョ氏が改革開放当初に区長をしていた当時のことであるが、テモクーをどのような形で復活させるかということについて考慮し、最初は文化娯楽活動として行うことにした。1984年以前にも、太

陽鼓はどここの村にもあったが、チョーバーの活動の場所がなかった。このため、三人の長老が相談して、活動の場所を作って、太陽鼓を保管することにした。太陽鼓は適当に放置してよいものではなく、また誰かの家に置いておけばよいというわけにはいかないからである。経済発展により住居の様式が変化して、太鼓の保管には不便になったこと、またチョーバーの妻子が太陽鼓を恐れて置きたがらないという理由もあった。

「卓巴房」が初めて作られたのは、1981年にバードゥオー村に作られた「文化娯楽室」である。1996年2月にはバーヤー村中寨にも作られた。名目上は「復活」であるが、1958年以前には太陽鼓専用の部屋はなく、チョーバーの住居に保管されていたという。また、太陽鼓は1958年に全ての村で破壊され、「地主」「迷信」などのレッテルが貼られ、チョーバーも批判闘争にさらされた。現在では、どここの村でもテモクーを行うが、正式の太鼓の儀礼を行っているのは、前述の二村だけである。「卓巴房」があっても、太鼓の儀礼を行っているとは限らないという。例としては、バーラー（巴拉）村下寨では、毎年比較的整ったテモクーを行うが、この村にはチョーバーがいないので、太鼓の儀礼は行われていない。太陽鼓は学校に保管され、校庭に出して敲くが、「卓巴房」はない。

＜郷政府のテモクーの7人の長老＞

次に、郷政府のテモクーにおける7人の長老について聞き取りを行った。長老、すなわちチョーバーの人数は、その代表する集団の規模によって異なる。小さい村の場合は3人、

中くらいの村では5人、最大で7人という具合に、人数の制限がある。モーチョー村には、すでに述べたように5人の長老がいる。

郷政府のテモクーにおける7人の長老の内訳は以下の通りである。

(1) チョーバー (卓巴) : 「母親」を代表するが、これはかつて「母系社会」だったことによるものだという。今回のテモクーではシャーチョー氏が担当したが、バーヤー村のチョーバーの「家族」であるとともに、政府の中で年長(70才)だという理由によるという。

(2) チョースー (卓色) : 「父親」を代表する。白佳林氏が担当した。

(3) バーヌー (巴努) : チョーバーの後継者、つまり次のチョーバー。モーチョー村のブルーミャオ (布魯苗) 氏が担当した。

(4) スーヌー (色努) : チョースーの後継者、つまり次のチョースー。ポーチョ氏が担当した。

(5) コプル : チョーバーとチョースー以外の「家族」の代表者。チヌオ族の村落には、どこでも三つの「氏族」があるので、三つ目の「氏族」の代表者であるという。この「三つの氏族」については、後述する。ジャグオ (炸果) 村出身のバイラーチャ (白臘者) 氏が担当した。この村落にも、コプルの「氏族」のチョーバーがいるが、整った制度としては復活していないという。

(6) プルヌー : コプルの後継者、つまり次のコプル。バーライ (巴来下寨) のルォーアーユー (羅阿玉) 氏が担当した。

(7) ナイグー : チョースーの二人目の後継者で、スーヌーの後継者でもある。チョースーの地位が一番高いと考えられているので

(地位の順位とは矛盾しているが)、他の「氏族」よりも一つ多く席を設けているという意味があるという。チョーバーにも二人目の後継者がいて、やはりナイグーと呼ばれるが、この席には参加していないという。バーヤー村のバイラーチョー (白臘車) 氏が担当した。

以上に加えて、モーチョー村の場合には、二つの「氏族」の副長老、つまりチョースーが「ヌー (努)」, つまり副長老を担当しているという説明がポーチャ氏からあったが、これは上述のモーチョー村についての説明を裏付けている。

これらの名称と順位は、政府のテモクーの際のアナウンスの内容と若干の相違があるが、なぜそうした相違があるかについては確認していなかったので、今後の課題とする。

<チョーバーと三つの「氏族」>

チヌオ族のかつての大きな村落としては、バーヤー村、バーカー村、バーサン村の三つがあげられるが、チヌオ族の「氏族」は、はるか以前の三つの「大氏族」に関係があり、「母親寨」「父親寨」という役割もその時代に始まるという。はるか以前というのは、まだ鉄器がなかった時代のことだという。

チヌオ族は歴史的に三回の移動をくり返して来たが、第一の故郷がスーチェ、二番目がジェジュウ、三番目が現在のチヌオロックである。チヌオロックは、現在の郷政府の所在地で、タイ族の土司 (中国王朝から間接支配を任された少数民族の首長のこと) の管轄下にあったものの、「チヌオ人の場所」「自分たちの場所」という意味があり、「山」という意味はないということである。チヌ

オ族の祖先がまだ二番目の故郷であるジェジュウにいた当時、三つの「大氏族」があり、それぞれウーユー（屋熱、「木のでっぺん」という意味で、第一子にあたる）、アーハー（阿哈、「木の叉」の意味で第二子）、アーシー（阿細、「木の枝」という意味で、第三子にあたる）と呼ばれていた。

「母親寨」「父親寨」といった概念は、ジェジュウから移住する際に、「父」「母」がそれぞれ一部の住民を連れて、現在住んでいる場所に移住したことに由来し、各氏族に（正確にはアーハーとアーシー）それぞれ「母親寨」「父親寨」がある。アーハーの「父親寨」はバーポー村、「母親寨」はバーピャオ村、アーシーの「父親寨」はストゥー村、「母親寨」はバドゥオー村である。これに対してウーユーの「父親寨」「母親寨」は不明であり、1950年代の民族識別工作の段階では「未識別」の集団とされていたが、1979年にチヌオ族が公認された際に一緒にチヌオ族であることを承認した「本人」（漢語の呼称で、「先住民」の意味がある）と呼ばれる集団のことである。チヌオ山付近の他、モンラー県の象明県やラオスにも分布しているという。かつての故郷から移動する際に、「本人」の一部がモンラーにいったのではないかということであり、歴史的に茶の産地として知られて来た「六大茶山」の中でも象明の方が交易が盛んだだったので、そこに移住していったのではないかという話しであった。

2004年2月の調査では、たまたまテモクーに来ていた「本人」の女性から聞き取りを行うことができたが、「本人」は「本族」とも呼び、子供の頃は漢語を話していて、チヌオ

語は大きくなってから学んだものである。以前は「本族」と言ってもそれで通用していたが、人口が少ないので1979年にチヌオ族にすることにしたという話しであった。冗談まじりに、「私たちは原始部落ですよ」と言っていた。漢族と同じ春節を祝う。近くにいた人から、「取り残された漢族ではないのか」という問いかけがあったが、「どこから来たのかはわからないが、本地人（先住民、ネイティブの意味）で、元は漢語を話していた」と答えていた。

ウーユーの「氏族」については、多分に民族識別工作の影響が強く、同じチヌオ族として公認されてから、過去の歴史を遡及して説明したものではないかという印象を受けた。

各「氏族」に属する村落の一覧については、表1を参照していただきたい。

<「太陽鼓」について>

「太陽鼓」については、郷政府のテモクーで使用した最大の太鼓は、チヌオ民俗山寨から借りて来たものであるという。また、筆者が訪問した際に、聞き取りを行った郷政府の文化センターの事務室には、数個の太陽鼓が積み上げられて保管されていた。ボーチャ氏によれば、「自分たちがチョーバーなので、太陽鼓を怖がらない」ということであった。

「太陽鼓」の意味については、これは漢族の呼称に過ぎず、形状が太陽に似ているからだという。また、この問題について初めて質問したのは、1994年頃に訪れた「東京大学歴史学部」の研究者だという話しであった。「太陽鼓」は、チヌオ語で「ストゥー」呼ばれ、「最大の祖先」という意味で、前述の「マーヘ

表1 チーヌオ族の「氏族」とそれに属する村落

1. 屋熱 (wure) 氏族：茄鷄 (jieji), 曼哇 (manwa), 曼瓦 (manwa), 洛科 (luoke)
2. 阿哈 (aha) 氏族：巴坡 (bapo, 父親寨), 巴漂 (bapiao, 母親寨), 炸呂 (zhaü), 炸果 (zhaguo), 洛特 (luote), 巴別 (babie), 曼貴 (mangui), 巴奎 (bakui), 麼養 (moyang), 巴卡 (baka), 亜諾 (yanuo)
3. 阿細 (a × i) 氏族：司土 (situ, 父親寨), 巴奪 (baduo, 母親寨), 麼卓 (mozhuo), 巴亜 (baya), 生牛 (shengniu), 中白尼? (zhongbaini), 巴来 (balai), 巴傘 (basan), 回正 (huizheng), 回魯 (huilu)

*以上の村落名は文献資料中の名称と必ずしも一致していない (英文表記は中国語の拼音による)。

「マーニューの家」のことであるという。

まとめ

<チーヌオ族の命名法(2)>

三人の長老からの聞き取りでは、チーヌオ族全体の命名法について、さらに詳しい話を聞くことができた。チーヌオ族の命名法は、村落によっても相違があるが、以下のような種類がある。

(1) しりとり式の父子連名制

(2) 「巫師」、つまり宗教的職能者が名付ける場合には「ブーラー」から始まる名前を付ける。

(3) 身体的特徴によって名付ける。

(4) バーカー村にのみ、母子連名制が存在するが、「母系社会」の名残である。

(5) 「シャー」(沙)を最初につけるのは、臍の緒を背負って生まれた場合と、父親がいない人の場合。

(6) 「ポー」(婆)を最初につけるのは、妊娠中に離婚した場合と、災難や病気などで運が良くない時に、名前を変える場合。

(7) 「シュオー」(「探す」という意味がある)をつけるのは、結婚しないで生まれた子供の場合。

チーヌオ郷への訪問調査も十年以上になるが、最近になり、民族学的なことに関心が向けられて来た。チーヌオ族の場合には、中国の56の公認された民族の中でも、改革開放後の政策の見直しの中で唯一公認された民族であり、その点で社会的な注目度も高い。そして、チーヌオ族の公認には、杜玉亭氏の影響が非常に大きいことは、これまでの調査報告、あるいは筆者の論文の中でも述べて来たことである。

このため、チーヌオ族については、他の中国の少数民族以上に、杜玉亭氏が中国の公認の理論的枠組みの中で記録して来たことが、新たな言説として一人歩きしている印象を否定できない(杜氏自身は、けっして中国的な枠組みだけにとらわれない、自由な発想も兼ね備えた研究者であるが)。しかし、同時に、チーヌオ族自身の人々が、こうした事情を非常によく自覚しており、杜玉亭氏に心から感謝しつつ、同時にチーヌオ族の実情をリアルに認識しているということも重要である。今回の調査報告は、フィールドノートを整理したままのものであり、冗長な印象を免れないが、聞き取りをする場面ごとに、微妙に説明

が異なることを，できるだけそのまま記録しておきたいと考えたからである。今後の調査を通じて，より充実した研究にして行きたいと思う。

付記：本稿は，2004 年度共同研究助成費（D04-02）による成果の一部である。

参考文献

- 杜 玉亭
1985 『基諾族簡史』昆明：雲南人民出版社。
1989 『基諾族』北京：民族出版社。
- 夏 紹瑩
2000 『版納基諾民俗山寨景区介紹』景洪：西双版纳雨林文化有限責任公司。
雲南大学基諾族調査組・主編 高 發元
2001 『基諾族—景洪基諾山基諾族郷』昆明：雲南大学出版社。

中国雲南における定点観測の継続